

第三章 文化風土

市町村における文化活動は、一般に「地域おこし」の一環として、行政が大きくたずさわっている。大口市、菱刈町においても例外ではない。ある中核施設を積極的に利用することによって、地域の文化活動が展開される。私はこのレポートで、大口市及び菱刈町のそれぞれの項で、まず行政面での文化活動を報告する。次に、文化活動の背後にある民間人によるボランティア活動の様子を描き出し、その実体に迫ろうとした。とはいってもものの時間的余裕のなさから、菱刈町に関しては、そこまで突きすすむことはできなかった。今回は不十分なままに報告し、今後の課題としたい。

第1節 「大口市の文化風土」では、大きな複合施設「大口ふれあいセンター」のこと、また生涯学習について述べる。次にイベントとしての「味な祭典」と「スターダスト・イン・オークチ」のこと。それらが多くの人々の献身的なボランティアによって支えられていることが示されるだろう。そして最後に「風の会」のこと。この会は本来遊びの会。だが自分たちも遊び、同時にその喜びを他人にも…という文化活動の原点をここに見るだろう。

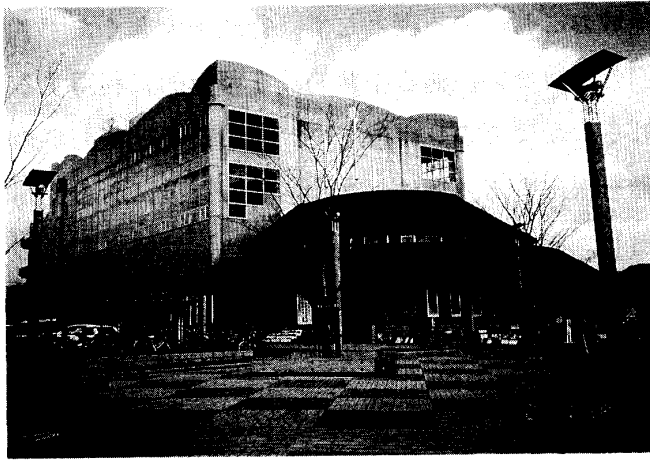
第2節 「菱刈町の文化風土」では、中核施設である「ふるさといきがいセンター」のこと、さらに展示物から(a)川内川の水害のこと、(b)郷土芸能のこと、次に保養施設地としての湯之尾温泉の今昔の概略を述べる。

第1節 大口市の文化風土

1 文化発進基地としての「大口ふれあいセンター」

大口市には文化事業（スポーツ事業はここでは除くことにする）を行うための施設として、もとJR大口駅跡地に建てられた「大口ふれあいセンター」と羽月川近くにある「大口文化会館」とがある。「大口文化会館」（大口市鳥巢305番地）は大小の二つのホールをもつ、地下一階、地上一階（一部四階）の鉄筋コンクリート造り（建築面積3,389㎡、延床面積4,158㎡）で、たっぷりとした敷地（敷地面積21,529㎡）に明るいオレンジ系褐色の姿を見せている。起工1980（昭55）年11月12日、竣工1981（昭56）年12月20日、開館は1982（昭57）年4月1日である。各種の催しものがこの大小の二つのホールで行われる。大ホールの収容人員1,306席（そのうち固定席1,100席）、舞台の間口は18m、奥行き14m、高さ8mである。小ホールはずっと小さく収容人員272席、舞台の間口6.5m、奥行き3.6m、高さ2.8mである。この「文化会館」は立派ではあるが一般に市レベルの公共団体がもつ、催しものの会場である。しかしこれから述べようとする「大口ふれあいセンター」は一味違う。これ

はいわば大口市の「文化発進の基地」となっている。このセンターはJR大口駅の跡地で、かつてはJR宮之城線、山野線が運行されていた。1987（昭61）年1月に宮之城線が、1988

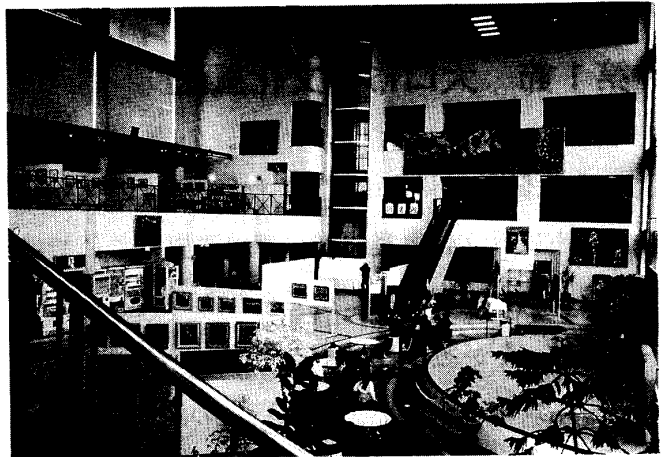


「大口ふれあいセンター」全景

（昭62）年1月に山野線が廃止された。その跡地をどのように有効利用するかが問題になったとき、「市民ふれあいの場」として、従来あった図書館、資料館、中央公民館（すでに老朽化していた）、視聴覚ライブラリーなどを含め、複合施設としてつくろうと、当初から計画された。したがって「大口ふれあいセンター」（大口市里2845番地2）（敷

地面積3,972.85㎡、建築面積2,582.62㎡、述床面積5,911.73㎡）はまず図書館（月曜休館）視聴覚室（36名収容）、学習室（22名収容）、歴史民俗資料館（大口駅の鉄道記念コーナーを含む）を含むばかりでなく、小人数の会合や研修会のための会議室、和室大（67畳、70～80名収容）中（33畳、40～50名収容）、小（18畳、15～20名収容）、さらに調理実習室（調理台5台）、工作実習室（25名収容）、音楽練習室（25名収容）、絵画室（25名収容）、ダンス練習室（40～50名収容）、トレーニング・ジム（更衣室・シャワー付き、15名収容）そして幼児室をもうけ、子供づれにも対応している。また3階には多目的ホール（折りたたみ椅子で400名収容）があり、これまたスライディング・ウォールによる間仕切りで、三つの会議場としても使用可能である。

そして2階は多く市民ギャラリーとして絵画をはじめとする展示場がある。このようにこのセンターは多種多様のものをすべて集めたという点に、一つの大きな特色をもつ。しかしこのセンターで特記すべきことは、一階のアトリウム（写真参照）と呼ばれる一つの大きな「遊びの空間」が存在すること



アトリウム

である。一階にはこのアトリウム以外に管理事務室（市教育委員会もここに入っている）もあるが、大部分はこのアトリウムで占められている。アトリウムとは本来、古代ローマの家の中庭付きの広間を意味するが、もちろんここは屋内である。ただ小さな曲線をもつ水路を作ることによって、屋外の感じをだしている。舞台があつて、そのところはチョットした野外音楽堂の雰囲気をもつ。しかしフロアは野外音楽堂のように階段式の座席ではなく、たんなる平坦なフロアである。テーブルと椅子があちこちに置かれ、やすらぎ、談

話の場所となっている。このフロアは非常によく清掃されていて、多様さの中に一種の美しさがある。アトリウムはこの施設中、もっともよくできている空間である。このセンターのもつ多様性のほかに、第二の特色として規模の大きさがあげられよう。大口市の人口は24,000人といわれ、その人口数からみると、この「大口ふれあいセンター」は大規模な施設といえる。JR大口駅の跡地を、公共利用ということで10分の1の価格で払い下げてもらい、さらに「ふるさと創生資金」の大半をこれにあてたといわれるが、創生資金の使い方としても成功例の一つといえるだろう。

今年（1998）の2月中旬、再調査のために大口市を訪れたとき、一階のアトリウム横の部屋をのぞいた。そこは展示場として使われ、まさに展示の準備中であつた。展示とは人形、パッチワーク、レザークラフト、そして造花、フラワー・デザインなどであつた。それぞれ小グループが集まっての展示会の準備中、それぞれのグループはそれぞれの先生をもち、日頃から創作に励んでいる。今回の短期間の調査では、大口市ではどのようなグループがどのくらいの規模で活躍しているのかを把握することはできなかった（大口市にもこの種の調査はないだろう）が、一つの手がかりとして、「大口ふれあいセンター」が主催する「ふれあい講座」の一覧表（日時及び場所、講師一覧表）を以下示しておこう。

〔表1〕 平成9年度 ふれあい講座学習日時及び場所

教室名	学 習 日 時	場 所
ふるさと探訪	7月～11月 1・3土曜日 13:00～15:00	現地・和室1（1階）
山 野 草	7月～11月 1・3土曜日 13:00～15:00	現 地
男 性 料 理	7月～11月 1・3土曜日 18:00～20:00	調理実習室（1階）
手 編 み	7月～11月 2・4金曜日 13:30～15:30	視聴覚室（3階）
ベ ン 習 字	7月～11月 1・3水曜日 10:00～12:00	視聴覚室（3階）
手 品 教 室	7月～11月 1・3水曜日 19:00～21:00	視聴覚室（3階）
太 鼓 教 室	7月～1月 2・4日曜日 19:00～21:00	音楽練習室（1階）
英 会 話	7月～11月 2・4土曜日 18:00～20:00	会議室4（3階）
着 付 け	8月～1月 1・3水曜日 19:00～21:00	和室(中)（1階）
大 正 琴	7月～11月 2・4金曜日 10:00～12:00	音楽練習室（1階）
ワープロ・初級	7月～9月の毎週火曜日 19:00～21:00	視聴覚室（3階）
ワープロ・中級	9月～12月の毎週火曜日 19:00～21:00	視聴覚室（3階）
生 け 花	9月～1月 1・3水曜日 10:00～12:00	和室(大)（1階）
太 極 拳	7月～11月 1・3土曜日 14:00～16:00	ダンス練習室(1階)
水 墨 画	9月～1月 2・4土曜日 14:00～16:00	絵 画 室（1階）
ビデオ初級	7月～11月 1・3土曜日 14:00～16:00	視聴覚室（3階）
竹 工 芸	9月～1月 1・3土曜日 14:00～16:00	竹 友 セ ン タ ー
ハ ー モ ニ カ	8月～12月 1・3金曜日 10:00～12:00	音楽練習室（1階）
木 彫	8月～1月 2・4土曜日 14:00～16:00	工 作 室
健康体操	7月～11月 2・4金曜日 10:00～12:00	羽月地区公民館
書 道 入 門	7月～11月 2・4日曜日 19:00～21:00	羽月地区公民館
郷土舞踊・民謡	7月～11月 1・3土曜日 19:00～21:00	針持青少年センター
園 芸	8月～10月 学習日別紙	伊佐農林高等学校
手 話 初 級	7月～10月 毎週木曜日 19:00～21:00	和 室 1
パ ソ コ ン	7月～9月 毎週木曜日 16:00～20:00	大 口 小 学 校
ふれあい教室	7月～2月 2・4木曜日 9:30～11:30	和室(大)（1階）

〔表2〕 ふれあい講座講師一覧表

教 室 名	講 師 名	住 所
ふるさと探訪	永井 利實	大口市里
山 野 草	杉本 正流	大口市大田
男 性 料 理	永吉シズカ	大口市曾木
手 編 み	村岡マスミ	大口市針持
ベ ン 習 字	中水 佳子	鹿児島市西別府町
手 品 教 室	高島 豊明	大口市大島
太 鼓 教 室	本村 明	大口市篠原
英 会 話	吉永竜司郎	大口市牛尾
着 付 け	中村香賀子	大口市小木原
大 正 琴	東條 肇	大口市里
ワープロ・初級	満井 利恵	鹿児島市山下町
ワープロ・中級	満井 利恵	鹿児島市山下町
生 け 花	栗山伊佐子	大口市里
太 極 拳	上村シズエ	大口市里
水 墨 画	浜木 徹人	大口市里
ビ デ オ	小村 紀昭	大口市曾木
竹 細 工	三好 一己	大口市曾木
ハ ー モ ニ カ	東條 典子	大口市里
木 彫	吉田 宗和	川内市御陵下
手 話 初 級	園田ひとみ	大口市牛尾
羽月地区公民館		
健 康 体 操	坂元 克子	菱刈町川南
書 道 入 門	富盛 憲子	大口市下殿
針持青少年センター		
郷 土 舞 踊・民 謡	工藤 和彦	大口市元町
伊佐農林高等学校		
園 芸	東 弘美	伊佐農林高等学校
大口小学校		
パ ソ コ ン	山脇 秀和	大口市青木
特別講座 ふれあい教室		

〔表1〕を見ていただければ明らかなことは、「ふるさと探訪」といった史跡めぐり、「山野草」といった自然草の観察、「園芸」などは当然、屋外で行われるが、その他ごく少数の講座を除いて、すべて「大口ふれあいセンター」で行われていることに気付く。「竹工芸」（竹友センター）、「パソコン」（大口小学校）は設備、機器、道具類の問題で、恒常的に希望者が多く、必要が強くなればふれあいセンターで実施可能となるものである。日時において月曜日開講の講座が少ないのはセンターが月曜日を休館日としていることによる。講座中「ふれあい教室」とは65歳以上の高齢者を対象とするもので、「くらしの安全」「ボランティア活動」さらに「健康体操」「グランド・ゴルフ」などのスポーツ大会をも含む講座である。

〔表2〕講師の詳しい住所はここでは必要ないので削除した。「ペン習字」（中水佳子）、「ワープロ」（初級及び中級）（満井利恵）の鹿児島在住、「木彫」（吉田宗和）の川内市、「健康体操」（坂元克子）の菱刈町を除き、すべて講師を大口市在住者で占めているのは注目に値する。それは自力で講座が開ける文化的背景があることを意味する。

2 イベントに見る大口市の文化活動

——「味な祭典」と「スターダスト・イン・オークチ」——

スポーツ大会、神社の夏祭りなどを除くと、大口市の大きなイベントを1997（平成9）年度でいうならば、「スターダスト・イン・オークチ」（8月9日）、「味な祭典」（12月上旬）、そして「アイス・カービングin大口」（1月31日～2月1日）であろう。「アイス・カービングin大口」（今年で3回目）は氷の彫刻ばかりでなく、氷を使つての遊びを工夫してのイベントである。しかしここでは「味な祭典」と「スターダスト・イン・オークチ」のみをとりあげることにする。とくに後者は昨年（1997）で10周年を迎えたということは、陰からこれを支えた多くの人たちがいたことを意味する。残念ながら今年（1998）は中止の予定である。「スターダスト・イン・オークチ」の主演はジャズ・バンド「スウィング・パーツ」（リーダー出木場^{ひろし}洋）であるが、イベントの準備で一年中そのことで追われ、本来のジャズ演奏活動ができなかったこと、10年目は身をひくのに丁度いい節目と考えられたこと、他方自分たちがやめることによって、新しいグループが誕生するかもしれないとの期待もあったという。筆者はリーダーの出木場氏に会うことはできなかったが、「スウィング・パーツ」のメンバー谷口^{なるひさ}徳寿氏、そしてサブ・リーダー的存在の瀬戸口裕樹氏にお目にかかり、種々話をうかがうことができた。「スウィング・パーツ」はすでに「ビッグ・マウス・ストーンパズ」と名前を新ため、デキシーランド・ジャズ・バンドとしてすでに活動を開始はじめた。瀬戸口氏によると、もうすでに九州で三番目以内の実力をもつデキシーランド・ジャズ・バンドであるとのこと。もっとも九州には福岡（ハッピー・ハウス）、長崎（ホット・ショット）、鹿児島（大口）の三つしかない。とにかく「スターダスト・

イン・オークチ」における「スウィング・パーツ」の活躍を、それも裏方としての活躍をここで述べないわけにはいかない。

まずメンバーは次のとおり。リーダーの出木場はドラム、出木場建材を経営、トロンボーンの徳田良和はクレーン車を動かす自営業者、バンジョの小倉健三（兄）はパソコンのソフト開発の仕事に従事、バスの小倉淳三（弟）は大口電子に勤務、トランペットの瀬戸口裕樹は瀬戸口電設を経営、トロンボーンの長瀬昌彦は義歯技工師、クラリネットの谷口徳寿は、若者向けのグッズをあつかう「夢市場」の店主、トランペットの乙津正成は建設業を経営、女マネージャーの南富美子は建設会社の事務員、そしてアドバイザーの小倉常靖は飲食店を経営、と各人それぞれ異なった職業人の集まりである。この中で徳田は菱刈町、長瀬は人吉市、小倉（常）の吉松町を除けば、すべて大口市在住者である。だから瀬戸口によると、飲み屋にいても、顔が知られているので、「やい、電気や、こっちへ来て飲め」といわれる。ビールと焼酎をいっしょに注がれ、「有難うございます」といって飲んだが、「不味かった」そうである。

このメンバーが「スターダスト・イン・オークチ」を10年間にわたりささえた功績は大きい。しかも、このイベントのために徹頭徹尾、裏方に徹したことである。表舞台での演奏、たとえばデキシーキングスの演奏を楽しむこともなかった。のちにVTRをみて、こういうこともあったのかと、のちに知ったことが多かった。（瀬戸口談）という。10年間を通してずっと出演したのは藺田憲一とデキシーキングス。その出場時間は夜の8：00～9：00時。野外に日が差しこんで暑い4時～5時の間に、木陰にパラパラいる客にむかって、人寄せの音楽を鳴らしつづけたのがスウィング・パーツである。

第10回（1997年8月9日）のパンフレットを見ると、音楽に関していえば、地元の高校生によるブラスバンド。木管アンサンブル「ポエ」（ピアノ堀内伊吹、クラリネット小川勉、ファゴット種口敬明、オーボエ市原隆靖）、「ハル」（フルートはる、ギターおおがたみずお）、そして「藺田憲一とデキシーキングス」。ゲストとしてなんと北村英治（クラリネット）と森サカエ（歌手）が出演している。この豪華メンバーで、市民に素晴らしい音楽を無料で提供していたということは驚くべきことである。第1回から第10回まで、それも野外（グラウンド）で、ということであったが、天候の悪化により、第1回及び10回は隣りの「大口文化会館」で行われた（谷口談）。

なぜ「野外で」との疑問が私たち部外者は思う。「スターダスト・イン・オークチ」のイベント名が示すように、それは「星を見る」ということが当初から組み込まれていたのである。「スウィング・パーツ」のメンバー（谷口、瀬戸口）の話を総合すると、ほぼ次のようないきさつがあった。1987年、大口市が星のもっともよく見える場所として、九州で一番との折紙がつけられた。それを当時の南日本新聞の記者（西村支局長）が報道した。しかし、市民からはなんの反応もなかった。それを不審に思う人がいた。当時NTTの大

口所長だった井上氏である。つまりこれを地域おこしのイベントとして使えないだろうか、というわけである。その意図のもとに井上氏はスウィング・パーツのリーダーである出木場氏と面談し、意気投合するところがあったのであろう。100万円の寄付を申し出たといわれる。ここに星を見ながら、あるいは星を題材にしたコンサートが企画されるようになったのである。それでは「蘭田憲一とデキシーキングス」が第1回から出演するようになったのは、どのようないきさつであったのか。ここに「スウィング・パーツ」(現在のビッグ・マウス・ストンパーズ)のアドヴァイザー、小倉常靖が一つの役割を演じている。当時小倉(常)は菱刈町で喫茶店兼中華のような店を開いていた。二階が広く、音楽の練習場として使えるというので、小倉(常)の好意で、スウィング・パーツのメンバーは夜、その店の一部を使っていた。かつて小倉はジャズ好きで、蘭田憲一とデキシーキングスの後援者の一人として、いろいろな世話をしていた時期があったらしい。おそらくそれとの関係であろう。1987年1月鹿児島で行われた「ニュー・イヤー・コンサート」(これは現在行われていない)に「蘭田憲一とデキシーキングス」が出演していて、そこへ出木場洋をはじめとする「スウィング・パーツ」の面々が会いにいったのが最初の出会い(出木場、TELによる取材)であったという。出木場がNTTの所長、井上氏に会ったのが1987年2月。だからリーダー出木場の頭に、星をテーマにしたコンサートを考えたとき、「蘭田憲一とデキシーキングス」がまず第一に浮んだのであろう。電話での話で、出木場氏は、当時NTTが日本電信電話から衣替えするときで、井上所長はなんらかのかたちで、地域に対するサービスを考えていたようだった、とのことである。しかしこのときの100万円の意義は大きい。「スターダスト・イン・オークチ」のイベントが10年間続くきっかけを与えたからである。NTTは以降、10年間、このイベントを支援しつづける。なぜ10年でやめたのかとの質問に対して、出木場氏は10年間続けているうちに、だんだんイベントに対する感動がうすれたこと、なにかクールな感じになったと述べている。これはアーティストらしい一つの適切な判断であろう。ただこのイベントを受継ぐ者を見つけられないままにやめることに、少なからぬ悔いが残る様子であった。第1回は雨の中、会場を「文化会館」に移しての開催。第2回目はなにがなんでも「野外で」との思い、5000人以上の人間が集まったときの喜び、そして市民の人々に一流の演奏を楽しんでもらえたとの喜び。ところが、それがだんだんイベントとしてマンネリ化したと感じたとき、また10年が一つの区切りと感じたとき、中止を決意したものらしい。イベントにはなんといっても金の裏づけが不可欠である。多くの場合、この資金獲得に裏方は大変苦労する。視点をかえて、このイベントの財政面をみてみよう。

そもそもこのイベントは当時のNTT大口所長の100万円がきっかけであることはすでに述べた。しかしそれだけのお金ですべてがすむわけではない。第10回「スターダスト・イン・オークチ」の場合を考えてみよう。97年度の予算書をみると収入合計約926万となっ

ている。つまり、第10回の開催のために、約926万円の金が必要だったというわけである。簡単に内訳をみてみよう。寄付金が122万円（NTT92万、サッポロビール30万円）、後援費200万円（大口市100万円、大口市商工会100万円）、広告料収入（パンフレット、看板）が183万円、もっとも大きいのはテレホンカード売上げで370万円で全収入の3分の1以上を占める。もっともこれは220万円の仕入れ費用を差引くと150万円の利益ということになる。これは市民一人一人の寄付ともいうべきもので、1枚500円のカードにイベントの印刷をほどこして、1枚1,000円で購入してもらうといったものである。（ただし入場料は無料である。）その他グッズ売上げ、雑収入、前年度繰越金などである。支出合計は時期繰越金11万円を入れれば、約926万円である。そのうち支出の大きいものからいえば、テレホンカード（220万）とグッズ（25万）の仕入れ代金が245万円。会場舞台経費（電気仮設・舞台仮設工事、音響照明設備、舞台装飾費など）が232万円、出演料（デキシッキングス、特別ゲスト、ハル、ポエ、司会者その他などへの支払い）が203万円、広告宣伝費107万円、その他事務費、飲食費、雑費合計が90万円である。ともあれ1,000万円近い金が動くわけである。広告料をとり、テレホンカードを売り、補助金をもらうためにかけまわり、宣伝広告に走りまわる関係者の苦勞が思いやられる。

お金のことが出た以上、「味な祭典」の金銭的な面から入り、そして「味な祭典」の話へと移していくことにする。お金にこだわるのは、イベントには必ず金が不可欠であること、一般市民はあまりにもそれに気付いていなくて、タダでできるものと思っていることに対する、筆者の反発が多少ある。そしてまた本来、自分たちで祭をすべきであるならば、市民自身が負担して参加するのが、普通の姿であると思っている。「味な祭典」は「スターダスト・イン・オークチ」に比べれば金銭的には規模は小さい。総額76万円である。そしてすべてを補助金でまかなっている点でも、ずっと楽といえるかもしれない。しかしこちらは「味な祭典」の実行委員長、陣之内敏氏が一人、会計の面で苦勞するという点に一つの特色がある。補助金の内訳は市が山村担い手補助金の名目で51万円出している。それは「味な祭典」が食文化を通して特産品の開発という側面をもっていることを意味している。大口市商工会の補助金が15万そして特産品協会の補助金が10万円で収入合計76万円である。この特産品協会というのは、商店、小売業者、製造業者の集まりで、年会費1万円で維持されていて、市役所の管轄下にあるという。支出は消耗品を含む材料費30万円、装飾費（料理陳列装飾、演出費用など）15万円、報償費（手伝ってくれた各グループへの報償金、謝礼）13万円、印刷費（チラシなど）8万円、雑費5万、広報費（広告宣伝費）3.5万円、予備費1.5万円である。金銭問題は以上として、「味な祭典」に話を移そう。97年度で「味な祭典」は2回目をむかえるが、主催は「大地の会」（味な祭典実行委員会）、会長は陣之内敏である。筆者は陣之内氏にお会いすることができなかったため、大口市商工会の内田安男氏より伺ったことをもとにレポートしている。

「味な祭典」の趣旨は印刷されている。要約すると次のようになろうか。近年農山村において、共働きの増加、また外食産業の進出によって、伝統的な食文化が失われつつあること、そこで伝統的な食文化を再現し、さらにこのイベントを通して、新しい食文化を創造し、ひいては地域の活性化につなげようといったものである。1997（平成9）年は12月7日に行われたが、毎年12月を予定しているのは伝統的な正月料理を伝えていこうとの啓蒙の意味もある（内田談）。場所は「大口ふれあいセンター」一階、公開展示はアトリウム、試食は和室大を使う。試食品は郷土菓子、鹿汁、手打そば、おにぎり、地鶏と伊佐米の英国風スープ、手作りコンニャク。試食品の中に「義士伝」なるものがあった。これは12月14日の義士の討入りの日に、昔は各郷中の学舎で「義士伝の輪読」が行われた。この「義士伝の輪読」は「曾我ドン傘焼」「妙円寺詣り」とともに学舎の三大行事だった。「義士伝の輪読」は武士道を鼓舞する意味ではじめられたのであろうが、郷中が崩壊してしまった今や、いつまで行われたかは不明。ともかくもそのさいに出された料理が「義士伝」。写真をみると、黒砂糖のドロツとした汁である。輪読中の疲れをいやすものだったらしい。説明によると、「真夜中の眠気ざましに、アワンナットウの温かいものが出された」とある。アワンナットウとは餅粟のとろとろの粥に黒砂糖を入れたもの、一種の汁粉のようなものと考えればよいようだ。

展示品は北薩摩の伝統食、野菜・海の幸・山の幸の取り合わせ、改善メニュー、西洋料理、山菜おこわ、山のつけあげ（黒豚のひき肉と豆腐をねり合せたもの）、手作りコンニャク、そして手打そばの実演、郷土特産品などである。このうち西洋料理は会長の陣之内敏自身が、ホテルニューオータニで8年、城山観光ホテルで7年間修行した腕をふるう。北薩摩の伝統食をはじめ、その他は大口市の主婦たちのボランティアだ。すなわち、山野王国、大口市生活改善グループ、そして大口市食生活改善推進委員会の人々である。この人たちは、展示品についてはある程度、各公民館に集まり作ってきたものを展示する。またこの主婦たちは試食会では、陣之内氏のもとで料理するばかりでなく、配膳、後片付けまでする。昨年（1997）12月の第2回「味な祭典」の主婦たちの動員数はなんと162名、この祭典に訪れた人の数は5,000人（第1回2,000人）にのぼった（陣之内、TELによる取材）とのこと。イベントにはまず金銭の裏付け、そして強力な協力者が不可欠であるが、「味な祭典」においても、市、商工会、その他の協力というまでもないが、この主婦たちの協力があつたからこそ、成功したといえる。会長の陣之内氏はこの主婦たちの生き生きと働く姿に、報われた思いをしたという。

3 文化の風―「風の会」―

筆者自身が今回の調査でもっとも強力な助言者は「スウィング・パーツ」のメンバーで、かつテディ・金城（鹿児島）の門下生でもある、クラリネット奏者の谷口徳寿氏である。「風

の会」のことを耳にしたのも、実は谷口氏からであった。そして調査が進むうちに、この「風の会」がたんなる遊びのグループではないこと、たとえば大口市がすでに実施している大口市芸術文化交流事業の陰の立役者であることを知った。ここでごく簡単に大口市の芸術文化交流事業設立のいきさつと概略を述べ、次にあまり知られていない「風の会」の実体を報告しよう。

版画家の竹之内直記及び磁器作家の川野恭和の「風の会」のメンバーが「作家村構想市民研究会」をつくり、「作家村構想」を隈元新市長に提案したのは1996（平成8）年11月中旬である。その構想は芸術家を大口市に住わせ、芸術活動をしてもらうこと、つまり地域住民や子供たちに創作状況を公開すること、さらにその成果を展覧会として公表し、さらに講演会や各種のイベントに参加してもらうこと。そのことによって市民への創作指導をも担当するといったもの。その背後にはこのような文化交流事業を通して、市の目指す「豊かで住みよい、若者が交流し定住する大口市」との考えにも沿うものでもある。市長もそのとき、極力実行する方向で検討する旨を表明している。構想によると、招待すべき作家は選考委員会で選び、その作家の滞在期間は半年から一年間、民家に居住し、一人当たり月約7万円を助成すること、アトリエとしては公共の遊休施設を利用、具体的にいえば遠矢産婦人科跡の施設を使うとのことである。「風の会」のメンバー、竹之内直記自身すでにそれに近いことを実践している。筆者はまだ見ていないが、竹之内は布計小学校（山野）の廃校施設をアトリエとして使い、一家で住んでいる。ともかく市はこの提案を受け入れ、翌年（1997）には実施している。1998年3月現在まで、すでに2人の作家が大口市にきているので、そのプロフィールを簡単に記しておく。

- ① 角^{すみ} 明江^{あきえ} 1970年 滋賀県生まれ
1989年 東京学芸大学初等教育科卒業
1993年以降KOBATAKE工房

大口市居住期間 1997年6月2日～1997年12月1日

- ② 小林^{こばやし} 重予^{しげよ} 1957年 札幌市生まれ
1981年 文化女子大学生活造形学科
金属工芸専攻科終了
1994年～96年 インドネシア国立芸術大学

大口市居住期間 1997年9月9日～1998年3月20日

小林氏と筆者はインタビューすることができた。小林氏がいたバリ島（インドネシア）のウブドは私も何度か訪れたことがあり、氏の彫刻がインドネシアの樹木や自然への驚きにその発想の源のあることもよく理解できた。インドネシアの木はやわらかく、彫刻がしやすい。それに対して日本の木の堅さにはやや閉口していたようだ。受入れ側の準備不足もあり、不自由なこともあったようだが、大口市在住の彫刻家丁野政行氏の全面的な協力

があつて、ずいぶんと彼女は助けられたようだ。このような文化事業が成功するためには、丁野氏のような存在がどうしても必要なようである。(小林重予展のパンフレットに丁野氏の文章が掲載されている。)

さて「風の会」の実体にせまろう。筆者はそれこそ「風の便り」に、永野治氏が「風の会」の会長であるときいたので、電話をかけあれこれお願いを申しあげた。この点会長の前田和文氏には大変失礼なことをしてしまった。永野氏にお願いしたのは次のことであつた。「風の会」のみなさんの話をおききしたいので、集まれる人だけで集まって欲しいこと、夜、酒でも飲みながら話をしませんか、ということであつた。永野氏はそれでは夕方、6時宿のほうに迎えにまいりますから、すぐ出られるように待機しておいて下さい、飲むにいい場所があります、しかしそこは寒いところですから十分着込んで来て下さい、とのことであつた。そして約束の6時、丸屋旅館に永野氏は現われた。体の大きな男前で、なるほどこの人が会長なのだと思った。迎えのワゴンにはすでに竹之内さんが乗っていて、も一人運転手がいた。この運転手が会長の前田氏だったのである。そして連れていかれたのが山野の「風舎」(約100㎡の木造平屋)である。それは1998年2月9日(月)のことである。

この「風舎」こそが「風の会」の憩いの場所であり、「風の会」が主催する催し物の会場でもある。ここは地元の人には「緒方公園」とも呼ばれているところで、500坪(平坦地の部分)ほどの敷地に桜が植えられている。もとは焼酎作りのために、甘薯が植えられていたところとのこと。とにかくメンバーの家族の私有地であるその公園の一角に、三年がかりで会員たち自身が市内のある農家を移築し、一つの憩いの場所に仕上げたものである。とはいえ、雨戸があるわけではなく、広く開け放たれたままになっており、大きな囲炉裏^{いろり}があつて、冬はそこで暖をとりながら談笑することになる。筆者に十分着込んできて欲しいとはそのことを意味していたのである。当日集まって下さった方々は次のとおりである。

前田 和文(「風の会」会長、システム建築鹿児島勤務)

永野 治(建築工房ナガノを経営)

橋口 徳二(システム建築鹿児島を経営)

徳田 良和(ビッグ・マウス・ストーンパースのメンバー、クレイーン会社、自営)

竹之内直記(版画家)

川野 恭和(磁器作家)

前田氏は橋口氏の会社で昼間働いているが、夜になれば私が会長でえばることになっているとのことであつた。しかし実際には会長もなにもなく、各人が自由に、勝手に話し合う会との印象であつた。永野氏ははっきり「会の規則などない」といっており、会員数も10~12名とあいまいであつた。もっとも面白いと感じたのは酒が大好きで酔う人もいれば、全く酒が飲めない人(橋口、徳田)もグループに入っていることであつた。酒はもちよりで、会員はなにか食べるものを一品(たとえば「にぎりめし」でもいい)用意するのがき

まりといえば、きまりとのこと。その日は特別だったとみえ、いのししの上等肉が出され、また「そばまい」といい、そばの実のカラだけをとったものを煮て、それをさらにだし汁に入れて煮たものが供された。

のちに聞いた話では、この会が毎年11月初旬（日曜日）に「手作りバザー」をやるとのこと。会員が自分で作ったものをなにか出品する（ただし竹之内は版画以外のもの、川野はやきもの以外のもの）。椅子、テーブル、もろぶた、めんぼうなどの木工製品、文鎮、人形といったもの、手作りが得意でない人は山芋を掘って売りに出すが、これがまた評判ですぐ売れるとのこと。また食物も提供する。これは会員の奥様方の手作りである。ぶた汁、手作りクッキー、おにぎり、綿あめ、しんこだんごなど。そして売上げの二割は「風の会」の運営資金になる。このときの運営資金とは催しものの赤字の補填などに使われる。この「手作りバザー」はなかなか盛会で、300人ほどの人が集まる。午前9時開始だが、午後2時にはほぼ売り切れ。もちろん会場は「風舎」である。

すでに1996年6月、フルート奏者池田博幸をよんで演奏会を催している。そして今年（1998）3月29日（日）（16:00～18:00）、十曽池公園内の「フレンドハウス」で、講談「宝井琴星の会」を企画している。

さらに「風の会」の実態にせまろう。「風舎」で飲みすぎ、動けなくなった会員を車で迎えにきて運ぶのは会員の奥様方である。筆者の印象ではここの会員たちは女房に頭があがらない、ひょっとするとこの会はこの奥様方で支えられているのかもしれぬ。ともかくこの「風の会」は自分たち自身が遊び、かつ会員以外の人々にも遊びの場を提供している。小さな「風」でしかないが、「文化の風」を送り続けている。ここに筆者は文化活動の原点を見る思いがする。

第2節 菱刈町の文化風土

1 「ふるさといきがいセンター」と生涯教育

大口市の「ふれあいセンター」に相当するものが菱刈町の「ふるさといきがいセンター」（菱刈町前目2019-1敷地面積5,064.07㎡、建築面積1,138.10㎡、延床面積1,455.96㎡）である。「ふるさといきがいセンター」はどちらかというと図書館と郷土資料館（二階）との印象が強い。もちろん学習室（30席）、視聴覚コーナー、創作室、そして和室研修室（36畳）があるのだが、「ふれあいセンター」のように遊びの空間がないだけに、館全体の印象は、学習の場所との雰囲気。しかし菱刈町の人口（10,200人余り）を考えると、立派な図書館、学習施設といえる。

よくできていると思われるのは二階の郷土資料館。展示にいろいろの工夫がこらされて

いる。とりわけ目をひくのが (a) 「川内川の水害」に関する記述、(b) 「郷土芸能」の記述、そしてその一部を私たちはVTRで見ることができる。この二つは菱刈町にとって非常に重要であるので、(a) (b) に関して、その要約を記す。

(a) 川内川の水害

川内川は鹿児島県下一の長流で、日本でも有数の暴れ川。河川改修以前の川内川は大きく蛇行、堤防も低く、大雨のたびに一面湖のように水田が冠水、大きな被害を受けた。そのため明治時代から地区住民が労力と経費を負担して、工事をすすめてきた。歴史をさかのぼれば、川内川の改修工事は永禄年間(1588)頃から始められている。本格的工事は1969(昭44)年度からで、それによって現在のように整備された川内川となり、被害も激減した。筆者はかつて川内川がどのように蛇行していたかを知る貴重な航空写真(撮影1978[昭53]年11月、倉庫に保管)を西賢一(町教育委員会、生涯学習課長)氏の御好意で見せていただいた。その様子をわかりやすく図解したものが会場に展示されている。

川内川がいかに「暴れ川」で、どれほど地域住民を苦しめたかを示すデータ(1926[昭和以降])は次のとおりである。

- 1927(昭2)年8月11日 500mmの集中豪雨、湯之尾は2階まで浸水、流出家屋8棟、
荒廃耕地12町の大災害
- 1928(昭3)年6月21日～28日 洪水、復旧工事中の荒瀬堤防被害、湯之尾仮橋
- 1934(昭9)年7～8月 未曾有の大干害
- 1942(昭17)年8月28日 台風、上流で250mm、旧菱刈町で1,149棟の被害
- 1945(昭20)年9月17日 枕崎台風、上流200mm以上、湯之尾湯小屋流出
- 1949(昭24)年8月15～16日 ジュディス台風、上流700mm以上
- 1951(昭26)年10月14～15日 ルース台風、風雨激しく旧菱刈町63棟全壊、前目では鉄道
線路まで浸水、収穫直前の水田冠水(農民にとってきつい被害)
- 1954(昭29)年8月16～18日 台風5号、上流で400mm、湯之尾浸水、堤防決壊、水田の冠
水
- 1956(昭31)年7月27～28日 栗野で300mmの降雨、湯之尾で4.15mに増水、床上浸水65棟、
床下浸水23棟
- 1959(昭34)年9月16～17日 台風14号、この年6月～9月まで湯之尾温泉街は11回の浸水
- 1964(昭39)年8月20～24日 台風14号、霧島山系で1,000mm、菱刈で300mmの降水
- 1969(昭44)年6月26～30日 上流で400mmを越え、30日湯之尾で4.26mmに増水、床上60棟、
床下21棟が浸水、前目、下手、本城の水田冠水
- 1971(昭46)年8月4～6日 台風19号、上流で700～1,000mmの集中豪雨、昭和2年(1927
来の大洪水、湯之尾で5.85mに増水、湯之尾、本城、筑地、下手などで住宅床上浸
水27棟、床下浸水92棟、流失2棟、半壊8棟、非住宅全壊5棟、半壊3棟の被害、

道路損壊35, 河川堤防損壊42, 田畑の流失埋没19ha, 冠水620ha, 水路農道の被害など被害総額は4億を越えた。

1972(昭47)年7月5～6日 集中豪雨, 湯之尾で最高水位5.25m増水, 重傷者3名, 全壊36棟, 半壊25棟, 一部損壊57棟, 床上浸水142棟, 床下浸水194棟, 農道, 河川, 作物被害など6億5千万円程度

1976(昭51)年9月10日 台風17号, 雨量292mm, 湯之尾で最高水位5m, 床上浸水77棟, 床下浸水37棟, 農地冠水243ha, 作物被害など被害額4億円程度

1979(昭54)年6月28～30日 集中豪雨, 連続雨量595mm, 湯之尾で最高水位5.34m, 床上浸水68棟, 床下浸水34棟, 農地冠水240ha, 農地被害など被害額2億円程度

1982(昭57)年7月25日 集中豪雨, 309.5mm, 湯之尾最高水位5.55m, 半壊1棟, 一部破損2棟, 床上浸水94棟, 床下浸水44棟, 農地冠水510ha, 土木施設, 作物被害など被害額2億7千万円程度

1989(平元)年7月27日 台風11号, 一部損壊3棟, 床上浸水21棟, 床下浸水37棟, 農地, 水路, 作物などの被害額4億2千万円程度

1992(平4)年8月8日 台風10号, 半壊1棟, 農業施設, 農作物などの被害, 被害総額3億5千万円

1993(平5)年7月30～8月1日 冠水483ha, 道路, 河川, 橋, 農作物など被害, 被害額9億8千万円, この年の雨は未曾有の長雨で, 年間降水雨量4,223mmと平年の倍近い量であった。農作物も日照不足で, 特に水稻はイモチ病大発生により, 収穫皆無の所もあった。総被害額20億を越えた。

(b) 郷土芸能

郷土資料館のVTRでみられるのは「湯之尾^{ゆのおかんまい}神舞」と「下手^{しもてしやくじょうおどり}錫杖踊」である。いずれも県指定の無形民族文化財に指定されているが, 前者の指定は1998(昭63)年3月23日,



湯之尾神社

後者は1962(昭37)年10月24日である。錫杖踊は下手水天神社の奉納踊りとして, 11月28日に毎年行われる。それに対して湯之尾の神舞は湯之尾神社の奉納踊りで, 今では11月23日の例祭で3年おきに演舞されている。筆者はVTRでしかこの両者をみていないが, 歴史の古さもさることながら, 踊りの古い形式を伝えていると思われること, その踊りに多様な面白さのある意味において, この「湯之尾神

舞」をずっと高く評価したい。

湯之尾神社（菱刈町川北上原2,461番地）は旧湯之尾温泉街と新しい温泉街とのほぼ中間の道路沿いにある。祭神は鎌倉権五郎景政の霊。神社由緒によると、景政は相模国（神奈川県）鎌倉の領主、鎌倉権頭景成の子で、桓武平家の流れをくむ。通称権五郎といった。寛治元年（1087）、陸奥守源八幡太郎義家の陸奥征伐に景政16歳で義家に従い参戦、そのとき敵将、鳥海弥三郎から右眼を射られ、景政大いに立腹、矢を抜かないまま七日間弥三郎を探し求め、遂に彼を捕えて射殺した武勇の人。ちなみに歌舞伎の「^{しばらく}暫」の主人公は鎌倉権五郎景政である。

神社の建立の年号は不明。ただし1989（明22）年境内整理の際に、文明5年（1473）と記した石碑を発掘した。また菱刈家第11代忠氏の鐘があり、それには文明11年（1479）とあり、それらのことから^{かんしやう}勧請は文明時代（1470年代）と考えられている。1950（昭34）年浮浪者による火災のとき、取り出した遺品で、拝殿に掲げてある額面の背後に、^{ちやうきやう}長享三天巳酉菊月吉日（1489）と記してある。

御身体は木像三体、神鏡一面、その神鏡の背面に、天文八年（1539）巳亥仲夏如意敬白大願主 藤原相模守（菱刈家14代重州）と記してあるという。また彼は熱心な崇敬者であったとのこと。さらに由緒によると、景政の霊が当地についたのは12月29日、年末の忙しい時、そのため人々は多忙で門松も立てず、年の始めの賀儀を7日に行った。したがっていまでも当地の人々は年始になっても門松を立てないのを古式としているという。なおこの神社は眼病に靈験があると伝えられている。祭祝はすでに述べたように現在は11月23日、三年毎に神舞が奉納されている。

郷土資料館の説明では「天の岩戸の前で、天照大神の御心を慰めようと舞ったのがはじまりといわれている。舞は全部で33種類あり、11月23日の夜に舞われる。この神舞は1492年頃から五穀豊穰・無病息災を祈願するために氏子によって奉納されている」とある。テープにはそのうち8つほど収められている。33種類がすべて行われるのかどうかは不明。VTRでの印象を次に記しておく。

壺 番 舞：清めの踊り、二人の若者の舞いで優雅

花 舞：四人の稚児による清めの踊り、面をかぶった白髪の子が登場する

地割の舞：弓矢をもった二人の若衆の踊り

金山の舞・氏舞：男神が女神に求愛する。動きの激しい舞い

龍蔵の舞：鏡をもった神が岩戸の前でおどる

田ノ神舞：豊年に感謝する田ノ神舞、ややコミック、さいごに撒きものをする

火の神舞・大王の舞：火の神と大王の問答をまじえた踊り。火の神が大王に一夜の宿を頼むが、断られて、火の神が怒り狂う舞い

手力^{たちから}の舞・戸隠^{とかくし}の舞：手力の神が岩戸を開ける舞い。激しい動き、それに合わせて戸隠の神もそれに協力。のちに戸隠の神は太陽と月のシンボルなのか、赤と白紙とで張られた二つの四角錐でかたちづくられたローソク入りのものを手にもって舞う。照明が消され、赤と白が手元で浮かびあがる。素朴だが幽玄。

「下手錫杖踊り」の由来は永禄年間、島津義久が北薩の豪族菱刈隆秋を大口城に攻めたが苦戦、弟義弘が水天神社に戦勝祈願したところ落城した。その後、使僧として功績のあった盛良^{せいらい}法師が黒坂寺の住職となり、その返礼に錫杖踊りを創案し、11月28日の例祭に奉納するようになったという。島津側には戦勝祝いの踊りだが、菱刈側にとっては、敗戦を思い出させるにがにがしい踊りだったに違いない。

その他「荒田三段打ち分け」(町指定無形民族文化財1969〔昭44〕年指定)(朝鮮出兵に従軍した島津義弘の戦勝祈願に踊ったといわれる太鼓踊り)、「前目^{まいめふもと}麓のオバッチョ踊り」(町指定無形民族文化財1987〔昭62〕年指定)(同じく朝鮮出兵の凱旋祝いに始められたとされる、鉦の音色と天旗のゆれ動くさまの美しい、勇壮な踊りだという)、「田中種子島踊り」(町指定無形民族文化財1984〔昭59〕年指定)(江戸時代に伝わる、田中豊受姫神社の例祭〔4月18日〕の奉納踊り。種子島から伝えられたもの)などがあるという。

「ふるさといきがいセンター」は菱刈町役場を含む町内にあるが、やや離れたところに「菱刈町農村環境改善センター」と「菱刈町農業者トレーニング・センター」とが同一敷地内にある。どうもネーミングがお役所的で、筆者には気になるところであったが、助成金を獲得するうえで、どうしようもないことなのであろうか。とにかく前者はホール、イベント会場として使われ、後者もホール、イベント会場としても利用可能だが、基本的には屋内スポーツセンターのイメージである。この両者の敷地面積は40,000㎡、竣工されたのは「トレーニング・センター」のほうが古く、1985(昭60)年7月20日である。鉄筋コンクリート造の2階建、1棟で、1,655㎡、その中心を占めるのは多目的ホール(931㎡)と呼ばれるもので、文化的な催し物に使用可能である。またそれをわけて、バドミントン、卓球、バレーボールとして同時に使用することのできる施設である。その隣りにあるのが「農村環境改善センター」。竣工は1988(昭63)年11月で、鉄筋コンクリート2階建で、建物面積1,119.8㎡である。この建物のメインは370名収容の多目的ホールである。ステージがあり、その椅子は可動式になっていて、必要があれば平面として催しもの、軽いスポーツの場所としてもつかえる。しかし基本的にはホールとの印象を受ける。二階を吹抜けとするたっぷりとした空間をもつ会場で、ステージの反対側には映写室が備えられている。菱刈町教育委員会生涯学習課が主催する「町民大学講座」の開講式はここで行われる。

講座の内容はワープロ、料理、レザークラフト、ハーモニカ、詩吟、手芸・健康体操、手話、花木、和紙ちぎり絵、焼きもの、着付け、短歌、社交ダンスなど14講座にも及ぶ。しかし講師の半数以上は菱刈町以外のところから講師を呼んでいる。西賢一(生涯学習課

長)氏によれば、高齢者に関していうと、男性は女性に比べ外に出たがらない、人に接したがらない傾向がある。たとえばデー・サービスをとってみても参加者の男・女の比率は2対8あるいは3対7である。もっといい例が講座の「社交ダンス」、男性会員がいなくなり、結局中止になった。だから問題は家に閉じ込めている男性をなんとか外にひっぱり出すことであるという。西氏の話をしきかぎり、菱刈町の住民、とりわけ高齢者は実に恵まれている。「成人講座」なるものがあるが、これは高齢者を対象とし、もっとも参加者の多い講座である。年2回実施し、昨年は「上之原遺跡見学」「末吉町の絵画展、郷土資料館見学」であった。菱刈町がこのように高齢者に対して手あついののは、一つは65歳人口がすでに30%を越えているとの背景がある。このときもそうだが、講座はよく町のマイクロバス(29人乗り)を使う。したがってマイクロバスの手配が一つの問題として残る。マイクロバスは老人福祉センターがデー・サービスとしても使うし、また保育園児の送迎にも使われる。そこで生涯学習課は町営バスを使いすぎるとの町役場内部からの批判も出る。町もバスのやりくりに困ったのだろう。老人福祉センターのバスを保育園児の送迎にまわしたところ、レンタカー業者から「老人福祉センターのバスから保育園児が降りてきた」とのクレームがあった。クレームをつけるほうもつけるほうだが、これは町のやり方に問題があると思う。これは予算の出处と使用目的を正確にすると主旨があるのだろうが、いずれも基本的に町として使用するのだから、バスの横書きには「町営バス」で十分だ。そうでないと非常に効率の悪い使い方になる。西氏によると将来、学校の先生、菱刈鉱山の人々など、菱刈町に転入してくる人のための講座や、税金やゴミ問題、福祉問題などで進んでいる地区へ出向いて学習する講座なども検討したい、と意欲的である。

2 菱刈町の夢 —— 新湯之尾温泉街(菱刈町発展の鍵) ——

菱刈町は1万余りの人口をかかえる町であるが、同じ伊佐地区でも大口市にないものをもっている。一つは菱刈鉱山(住友金属鉱山)であり、江戸時代から続くといわれる湯之尾温泉街である。大口市はかつて金鉱をもっていて繁栄した時期が2回(1900年代〔明治36~39〕は、上牛尾で、1940年代〔昭和15年〕は下牛尾)あるが、いずれも一方は大正期、他方は昭和期に廃坑になっている。その意味で、この二つは菱刈町にとって貴重な財産である。しかしここに思わぬことが起こった。1984(昭59)年夏から湯之尾温泉の泉源が枯れ、さらに温泉街一帯の地盤が沈下するという事態が生じたのである。原因は一般的に約北4 kmにある菱刈鉱山の大量の湯抜きによるものといわれている。つまり坑道掘削のための湯抜きである。しかしその原因の徹底的究明がなされないまま、菱刈町の仲介による政治的決着によってこの件が解決された。その結果、町は川の両岸の温泉街(旧湯之尾温泉及び鶴^{うどまる}泊温泉)を1,000mほど下流の右岸に移転させた。以下、その間の事情と、今後の展望に目をむけて、若干の私見を述べてみたい。新しい湯之尾温泉街が昔ほどの繁栄でない

にしても、なにがしかの活気を取りもどせるならば、それは温泉業者ばかりでなく、菱刈町発展の鍵ともなるからである。

地盤沈下の実情は今日でも旧湯之尾温泉街を注意深く観察すれば、はっきり見てとれる。とくに立山商店は道路にむかって沈みこみ、建物に亀裂が入っている。その沈下は全体が一様に沈下するといったものではなく、デコボコに沈下した。^{おこせすなわ}生越 忠氏はその著書「検証・危険列島」（日本文芸社）の中で、住友金属鉱山の菱刈鉱山が、大量に坑内温泉水を汲み上げたことが原因となって、1984年6月末ごろから地盤沈下が始まったとしている。それが建物の損壊や道路の沈下・陥没による甚大な被害が発生したこと、「…約一年間の最大累積沈下量は二百数十センチメートルにも達した。しかしここにも鹿児島県の地盤沈下調査用の水準点が設置されなかったことによって、このデータも、公式の記録には取り入れられずに終わった」（P105）と指摘している。はっきりしていることは次のことである。坑内温泉水の汲み上げによって、地盤沈下が生じたとするならば、その実情をもっともよく知っているのは住友金属鉱山の関係者である。鉱山側は公式的に地盤沈下の原因を認めていない。なぜ町が仲介に入り、原因を特定せずに解決をはかったのか。鉱山側に「全面協力」をひき出し、町に寄付をするかたちですでに13億近い金を出させたこと、そして町が被害者への移転や補修を補助するかたちで解決されたのか。朝日新聞（1997年7月31日付）は当時の町長、久保敬の政治的判断がそこにあったことを記している。それによると久保氏は「町が仲介しなければ裁判になり、長引けば鉱山側は開発が遅れ、住民も生活にこまる。今考えてもああするしかなかった。」と語っている。「住民も生活に困る」とは、被害者への早い補償ということばかりではなく、菱刈鉱山で働く菱刈住民が念頭にあると思われる。住友金属鉱山と関連会社を含む従業員数は220～230名といわれ、そのうち8割以上が町内採用者である。つまり雇用の面でも、町の税収の面（固定資産税約1億4,600万円〔全体の四分の一〕、法人町民税約650万円、鉱山税約7,700万円）でも文字どおり菱刈鉱山は菱刈町にとって「金の卵」なのである。では菱刈鉱山はいつまで「金の卵」であり続けるのか。ここで「菱刈鉱山」の実態を見ていこう。

菱刈鉱山は江戸時代から、個人経営で金を掘っていた記録があるという。住友金属鉱山グループが有望とみて鉱業権を獲得したのが1969（昭44）年のこと。国の金属鉱業事業団が、この地域の調査を行っていたが、それは1981（昭56）年のこと。そのとき3本のボーリング調査で、その3本とも高品位の金鉱脈にあたった。それをうけて、同年住友金属鉱山が18本のボーリング調査を実施、18本全部が金鉱脈をとらえた。俗に「千三つ」といわれ通常は1,000本に3本の確立であることからすると、18本のボーリングがすべて金鉱脈をとらえたことは大変な成果であった。

翌1982（昭57）年組織を発足させ、12月より開坑開発に乗り出す。そして1985（昭60）年7月より出鉱を開始した。菱刈鉱山の埋蔵金量は250～260 t と見込まれており、年8 t

の産出とみても今後このペースでいけば、あと30年は掘り続けられる状況である。この埋蔵量は日本最大といわれた佐渡金山のおよそ3倍の量である。その内訳は本鉱床150 t (1981年発見)、山田鉱床50 t (1988年11月発見, 1991年3月出鉱)、山神鉱床50 t (1990年発見, 1992年4月出鉱)である。1997年5月末、菱刈鉱山は金産出量の累計が83.1 tに達し、国内過去最大の佐渡金山(1601～1985年)を抜くことになる。これはもちろん、科学技術の発達にもよるが、出鉱開始から12年足らずの期間で達成したのは驚くべき記録である。今まで掘られた菱刈鉱山の坑道の長さは、直線距離にすると80 km近くになる。しかし掘られた金鉱石は菱刈町で製錬されるのではない。鉱石運搬専用のダンプトラックで約40 km離れた加治木港に送られる。専用船で愛媛県新居浜市の住友金属鉱山、別子事業所に送られ、そこで銅の製錬工程に入れられ、金を回収している。菱刈町にその製錬所を作らなかったのは、設備に多額の費用がかかること、さらに環境対策を考えると相当コストがかかるからである。金の需要はおよそ50%は宝飾品として使われ、その他ICなどの部品に使われる工業用金が20%弱となっている。現在金価格は低迷しているのは、不景気のあおりで宝飾品としての金の需要が落ちこんでいるからといわれている。一般的には経済の変動期、不安定期には金価格は上昇するといわれるが、今やその気配はない。それはロシア、EUの中央銀行が保有している金を放出していて、供給がだぶつき気味だからともいわれている。金の価格上昇・下降は住友金属鉱山の町への寄付金にも影響を与えるであろうから、今後菱刈町関係者は新聞を見ると、金相場を見ることが日常茶飯事になるだろう。

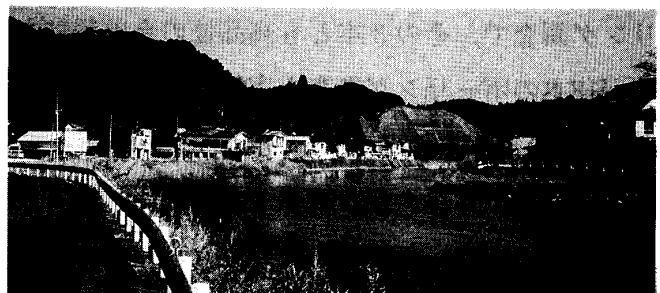
旧湯之尾温泉が盛んなときに、「湯之尾小唄」が全国募集された(鹿児島の「十字屋」がすべてお膳立てした、佐野俊郎談)。なかなかしゃれているので次に示す。

湯之尾小唄

一、湯之尾恋しと小鳥でさえも
誘い合わせて飛んで来る
湯之尾湯之尾と何故恋しがる
湯之尾湯が呼ぶ湯之尾湯が呼ぶ
湯が招く

二、川をはさんで二つの町は
どれが姉やら妹やら
並ぶボンボリ川面に映えて
あいのかけ橋あいのかけ橋
情で通う

三、湯之尾よいとこ夜霧にぬれて
屋形流して三味の音聞けば
赤いネオンに心もゆれて
呼ぶか情の呼ぶか情の
湯の煙り



川内川下流より撮影、左手が湯之尾、右手鶴泊

この二番の歌詞の「川をはさんで二つの町は、どれが姉やら妹やら」とは、川内川をはさんで、湯之尾温泉（右岸）と鶴泊温泉（左岸）が並ぶ（しかし通常は総称して湯之尾温泉という）ことを意味する。新しい湯之尾温泉はそれに対して右岸だけに並ぶので、情緒がないことになる。しかしこちらは川幅も広く、護岸工事がしっかりして水害の心配はない。問題なのは護岸がしっかりしているのはいいのだが、新しい温泉街の建物がそれより一段と低いところに建てられていることである。したがって一階からの川の眺望は土堤にさえぎられる。新しい夢をもって新しい温泉街が作られただけに残念である。筆者には初歩的な計画ミスであるように思える。旧温泉街のように川を臨むように建てられてこそ、温泉場としての雰囲気がありあがるというもの。もっとも旧温泉街は川幅もせまく、たびたびの水害に見舞われたとのこと、そのたびに休業。しかしよくしたもので、常連のお客が水害の跡始末に駆け付けてくれた（佐野）。よき時代である。歌詞中に「ボンボリ」「屋形船」「赤いネオン」とあるので、佐野氏に電話でおたずねした。ズラリと並ぶというわけではないが、ボンボリは多少はあったとのこと。「屋形船」は早水荘が一隻もっていて、外に小舟が浮んだとのこと。赤いネオンは宿を示す小さなものがやはりあった。しかしネオン街といったものではなかったらしい。したがってこの作詞者は、やや誇張はあるが、湯之尾温泉を知る人の作であろう。この歌詞には曲がつけられ踊りの振りもつけら



新しい湯之尾温泉街

れた。川の中に櫓が組まれて、その上で踊りがあった（佐野）。花火も打ち上げられたこともあったが、当局の取締りがきびしく中止になった。ともあれ、川にはまだ生活排水が流れ込むこともなく、実にきれいな水であった（佐野）という。

新しい湯之尾温泉について考えてみよう。なんといってもいいことは一軒一軒の敷地が広く、自動車が十分に駐車できるようになったことである。旧国鉄の山野線の廃止、バス路線も国道268号バイパスによって、将来あまり期待できない。やはり自動車の時代である。その点駐車場が確保された意味は大きい。旧湯之尾温泉源の枯渇問題は、鉦山と町によって設立された第三セクターによって、豊富な坑内温泉が給湯されている。問題はいかに客を呼びよせるか、にある。昔のように近郊の農家の田植や収穫あとの慰安の場所としての役割に、安住するわけにはいかない。田植や稲刈りも機械化され、共同作業ではなくなった。人の慰安の仕方も変ったし、遊び方も変化している。その変化に対応して客を呼びこむことはたしかにむずかしい。しかしかつての温泉街として一つのまとまった施設をもっていることは、やはり強みだ。

またストレス解消の場所としての温泉の効用は強まりこそすれ、減じることはない。そう考えていくと、新しい湯之尾温泉の将来はけして暗いものではない。各学校をはじめ、職業人のスポーツ選手たちの合宿場としての利用も可能だ。そのためにはグラウンドをはじめスポーツ施設の充実は不可欠だろう。また定期的な音楽会を温泉で催すこともいいだろう。ホールでするのではなくて、温泉街ですることによって一つの新しい道が開かれたいだろうか。車は遠くからの客を呼ぶことを可能にしている。できるだけ安く遊ばせること、遠方からの客に来て得をしたと思わせる商売をすることが大切だ。そのような客はまた客をつれてやって来る。JAや有力な農家と協力して菱刈町生産の米を市場よりやや安い値段で、宣伝として供給してはどうか。客を呼ぶためには民間業者が自分たちの力で地道な努力をする以外にはないと思う。金持ちでなく庶民を相手とするならば、もはや「ぬれ手で粟」の商法は通用しないだろう。

〔付記〕

資料として大口市、菱刈町が刊行しているパンフレット、印刷物をフルに利用させいただきました。忙しいなか、協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

(細谷章夫)